

# 清代モンゴルのイフシャビに対する法律の適用

——大活仏の領民と刑事裁判——

萩原 守

【要約】 清朝に支配されていた時代、貴族や奴隷を除く外モンゴルの遊牧民は、清朝皇帝直属の自由民ソムニアルト、モンゴル貴族の私的隷属民ハムジルガ、チベット仏教の活き仏の隷属民シャビという三つの身分に分類される。その内、前二者への司法支配の概要は既に説明されたが、シャビ身分の中でも庫倫の町の大活仏に隷属するイフシャビは特別な管理機構の下にあり、彼らの犯罪にどの法律が適用されたかという問題は、三系統の学説が乱立して実態が全く不明であった。そのため本稿で、清末に起こったイフシャビの刑事事件三件を選んで判決に適用された法律を初めて確定した結果、元々有効であったモンゴルの法『ハルハジロム』に加えて清朝の『蒙古例』と『大清律例』が清末までには強い効力を有するようになっていたことと、またその一方で『ハルハジロム』の判例集『オラーンハツアルト』も清朝滅亡までなお判例としての効力を持っていたことが証明できた。

史料 八四卷四号 二〇〇一年七月

## はじめに

清朝は内外モンゴルに盟旗制と呼ばれる独特の司法・行政機構を構築して永年支配したが、その司法支配の詳細はなお未解明の点が多い。筆者は、かつて清代モンゴルの裁判制度の研究を発表したが、ここでは、イフシャビ (Yekhe shabi、大シャビ) と呼ばれる特殊な宗教身分の人々に対する裁判を最初から除外して考察しており、将来への課題としてこれを残

しておいたのであった。<sup>①</sup>そこで本稿では、このイフシャビに対する司法支配、特に刑事裁判で適用されていた法律の問題に関して若干の考察を行うつもりである。

① 拙稿萩原Ⅱ一九八八、二九頁、註六参照。清代モンゴルのイフシャビを除く一般遊牧民に対する刑事裁判は、事件の発生した旗の役所（役所もしくは遊牧民の天幕内にあり季節移動している）で、旗長を裁判官とする第一審が行われ、刑罰として枷號や鞭（清朝本土の笞や杖に相当）のみを伴う軽微な案件の場合には、基本的に旗内で結審される。これは清朝本土での「州県自理の案」に相当するものである。また人命案件や少なくとも遺以上の刑罰を伴う重案は必ず、旗（第一審）→盟（第二審）→（駐防官）→理藩院（第三または四審）と上申され、そのつと擬案（判決原案）が作成される。清朝本土と同じ必要的覆審制度が存在したわけである。さらに人命案件は理藩院から皇帝

に上奏される。以上のような裁判制度は、基本的に清朝本土における制度をそのままモンゴルに導入したものと見なすことができ、多くの点で本土での制度に類似している。ただその一方で、裁判を担当する旗長や盟長が科擧官僚ではなくてチンギスハーンの血統を引き清朝政府によって任命された地元モンゴル貴族であった点や、中国本土のような「迴避の制」がなかったためにしばしば裁判官自身が地元の民事刑事の各裁判に直接的な利害関係を有する点など、本土の制度との大きな相違点も多数存在する。また、駐防官や三法司が介入する際の際の原則などを含めてまだまだ未解決の問題も多い。萩原Ⅱ一九八八、同Ⅱ一九九三、同Ⅱ二〇〇〇、滋賀Ⅱ一九八四等を参照。

## 一、従来の研究と問題の所在

### a. 清代モンゴルにおける平民身分の分類

清代のハルハモンゴル（外モンゴル）には、チンギスハーンの血筋を引きタイジ（*тайжи*、台吉）と総称されるモンゴル貴族や少数の奴隸身分の人々もいたことがよく知られているが、それ以外の一般遊牧民の身分上の分類に関しては、モンゴル国（旧モンゴル人民共和国）におけるナツアクトルジ氏らの研究に従って以下の三つのカテゴリーに分けるのが最も一般的である。<sup>①</sup>

すなわちまず最初に、清朝皇帝に直属する最も普通の遊牧民であるソムニアルト (sumun-u arad または guyay、箭丁) の身分がある。この人々は旗内に数個設定されている戸籍上の単位である「ソム (sumu)」に所属する自由民で、旗・盟・理藩院を介して清朝皇帝に対する直接的な賦役の義務を負う。従って彼らは旗長とその配下の役人たちに全面的に管理されている。

二番目にハムジルガ (hamjirga、隨丁) の身分がある。この人々は、モンゴル貴族であるタイジに隷属する私的隷属民で、本来、自分の主人たる貴族個人への賦役の義務のみを負う。この場合の貴族とは、旗長や盟長であったり、職を持たない間散の王公や貧しい下級貴族であったりもした。ハムジルガも、司法面では所属する旗長・盟長の管轄下にあった。

三番目はシャビ (shabi) と総称される身分で、チベット仏教の生き仏である活仏に隷属する宗教的隷属民である。この身分の中には俗人の遊牧民もラマ (lama、僧侶) の一部も含まれている。シャビは、主人である活仏個人への賦役の義務を負う。そしてその活仏が清朝政府から司法・行政権を認められていない低ランクの活仏 (司法・行政用の印鑑を有しない) であれば、そのシャビたちは所属する旗長の司法管轄下に入り、もしも活仏が旗長と同格の権利と領域を政府から認められた中ランクの活仏 (旗長の印鑑を有す) であれば、そのシャビたちは領主たる活仏 (またはその代理人たる高僧) の司法管轄下にある。後者がいわゆるラマ旗と呼ばれる活仏の旗であるが、盟長の管轄下にあるという意味では一般の旗と同じである。<sup>②</sup>

さらに、数多い活仏の中でもジェブツンダンバホトクト (jebundamba qutuγtu) と呼ばれる庫倫 (クーロン、現ウランバートル市) の大活仏は特に有力で、彼に隷属するシャビは特別にイフシャビと呼ばれていた。この大活仏は歴代にわたって清朝から一般の盟長と同格の権限を与えられており、どの旗や盟にも属さず庫倫辦事大臣を介して理藩院の直接管轄下にあった。ところがジェブツンダンバホトクトは盟に相当するような広い領地を所有しておらず、大部分のイフシャビは外モンゴル各地の一般の旗に散在したまま大活仏に対する賦役の義務を負っていた。<sup>③</sup> イフシャビは自分が居住する旗の旗長

や盟長による管理を一切受けず、エルデネシャンゾドバ (erdeni šanjudba) と呼ばれる高僧 (ジエブツンタンバホトクトの代理人) の管理下にあった。彼の衙門も同じく庫倫にあり、各地のイフシャビはオトク (otok) と呼ばれる戸籍上の単位にまとめられて彼の部下であるザイサン (zaisan) と呼ばれる役人たちが各オトクを担当していた。<sup>④</sup>

#### b. 各身分に対する法律の適用

さて以上の三身分の内の前二者、ソムニアルトとハムジルガの人々に対する法律の効力については、拙稿萩原Ⅱ一九八八、同Ⅱ一九九〇において、〈外モンゴルが清朝に帰属した一六九一年以降も『ハルハジロム (qalqa jirum)』が法的効力を持っていたが、一七二八年頃から『ハルハジロム』と『蒙古例』<sup>⑤</sup>が併用され始め、一七八九年頃から一九一一年までは『蒙古例』と『大清律例』のみが効力を持っていた〉と結論づけられている。<sup>⑦</sup>そして一七八九年頃以降は〈『蒙古例』が常に優先的に適用され、罪状と一致する条文が『蒙古例』に欠けている場合のみ『大清律例』が適用される〉という大原則があることも明らかになった。

しかし、三身分の内のシャビの人々に対する法律に関しては、現在の所実証研究がない。ただ勿論ある程度の推定は可能である。まず例えば低ランクの無印活仏に隷属するシャビの場合には、ソムニアルトやハムジルガと全く同様に一般の旗長と盟長の司法支配を受けていたわけであるから、常識的に考えれば当然、彼らと異なる特別な法律が適用されていたとは考えがたいであろう。ラマ旗の有印活仏のシャビの場合も、実証研究がないため決して断言はできないが、旗内で結審されるような軽微な事件を除けば一般の旗と同様に盟長による司法支配を受けていたので (前章の註①を参照)、ソムニアルトやハムジルガと同じ制度下にあった可能性が高い。清代外モンゴルの行政機構を詳述した Сономдарба 1961, p. 120 も、実例こそ挙げてはいないものの、ラマ旗には一般の旗と全く同様に満洲族の法律が適用されていたと断言している。満洲族の法律とは、『蒙古例』や『大清律例』にほかならない。

さて、これら中小規模の活仏のシャビに対する司法支配が従来ほとんど無視されてきたのに対して、盛んに議論されてきたのがイフシャビたちの犯罪にどの法律が適用されていたのかという問題であった。この点に関して現在の所三系統の説が並存しているので、その各々についてここで簡略に振り返っておきたい。

まず最も有名なのが〈『ハルハジロム』説〉（本章の註⑤参照）である。すなわち、清代の途中から清朝の法律が適用されるようになったソムニアルトやハムジルガとは異なっており、イフシャビの間では、清代は勿論のこと第八代ジェブツンダンバホトクトが亡くなる一九二四年頃に至るまで常に『ハルハジロム』が適用されていたとする説である。これはロシア人の法学者リヤザノフスキー氏が主張した説（Riasanovsky 1937, p. 61-62, 202. 和訳本 pp. 68-69, 264他）で、現在でも最も代表的な通説となっている。例えばロシア人研究者のディリコフ氏などがこの説を今も容認している（Диликов 1998, p. 13）。しかし、リヤザノフスキー氏自身は裁判記録を実際に調査したわけではないので、実証された説ではない。<sup>⑥</sup>

二番目に、〈『ハルハジロム』から「蒙古例」への交代説〉がある。これは、清朝帰属後の比較的早い時期においてはイフシャビに対して『ハルハジロム』が適用されていたが、清朝支配の強化とともに、遅くとも清末までには「蒙古例」へと法律の効力が交代していったという説である。言い方を変えると、ソムニアルトやハムジルガに関して行われたのと同じ法律の変化が、その変化の時期はともかくとして、イフシャビに対しても全く同様に行われ、前述の三身分ともに結局全て『ハルハジロム』から「蒙古例」へと同じ道をたどって法律の効力が変化したという説にもなり得る。この説は「蒙古例」の代表的な研究者である島田正郎氏による説であるが（島田＝一九八〇、三六九―四〇二頁、同＝一九八一、七七頁、同＝一九八二、九一四―九一八頁）、やはりこれも裁判記録を調査した結論ではなく種々の状況証拠からの推定である。また、一八二〇年から一九一三年までのイフシャビに対する『ハルハジロム』適用の際のモンゴル文判例集であるといわれる『オラーンハツアルト (ulayan qaqartu)』<sup>⑦</sup>の存在と、その判例中に清末の事例も収録されているという最も重要な事実とに対して、説明できる答えが用意されていない。

三番目に『ハルハジロム』、『オラーンハツアルト』、『蒙古例』等の併用説がある。まずモンゴル国(旧モンゴル人民共和国)のジャランアージャブ氏はЖалан-ажав 1958, p. 103において、上記『ハルハジロム』説を継承した上で、イフシャビに対する判例集『オラーンハツアルト』が、『ハルハジロム』を適用した裁判の単なる記録集なのではなく、過去に起こった類似犯罪での処罰の前例を調べて新たな犯罪への判決の参考に供するために編纂された本当の意味での判例集として用いられていたことを強調している。また氏は、『オラーンハツアルト』冒頭にある、『蒙古例』の家畜罰を銀に換算する際の比率と、『ハルハジロム』の家畜罰を磚茶に換算する際の比率とに言及しているが、Жалан-ажав 1996の序文等も含めて『蒙古例』の実効性には全く言及しておらず、氏の場合はあくまで『ハルハジロム』と『オラーンハツアルト』のみの併用説である。

一方、『オラーンハツアルト』を最初に出版したナツアクトルジ氏は、ロシア語で書いたその序文で、シャンゾドバ衙門の内部規定集『ヤームニドゥレム (yamin-u durim)』(モンゴル国立図書館所蔵)の文言を引用して『イフシャビと他の盟の一般牧民との相關案件には「蒙古例」を適用しイフシャビのみの案件には「ハルハジロム」を適用する』と述べ(Hanarjorj 1961, p. 4)、『ハルハジロム』がシャンゾドバ衙門の裁判で一九一一年まで優先的な効力を持っていたことと『オラーンハツアルト』が判例としての機能を果たしていたことを強調している(Hanarjorj 1961, p. 15)。従ってナツアクトルジ氏の説は、(他盟の牧民との相關案件では「蒙古例」だけ、イフシャビのみの案件では「ハルハジロム」と『オラーンハツアルト』の併用)という説である。またソドブスレン氏もこのナツアクトルジ説を支持している(Соодовсүрэн 1989, p. 23)。し、日本では窪田新一氏が『オラーンハツアルト』の内容を紹介してこの説に賛成している。次いで、行政機構を研究した前述のソノムダグバ氏も、『ハルハジロム』と『オラーンハツアルト』がイフシャビに適用されていたと述べているが、その一方で『イフシャビでも重大な案件のみは清朝の法が適用されていた』と一言だけ指摘している(Сономдэгла 1961, p. 106)。

結局ジャランアージャブ、ナツアクトルジ、ソノムダグバの三氏の主張は三者三様で少しずつずれているが、何らかの併用という意味では一応共通している。ただしいずれも、編纂史料である『オランハツアルト』等に依拠するのみで裁判の檔案史料を直接検討した訳ではなく、まだまだ説得力に欠ける。

以上述べ来たように、イフシャビに適用されていた法律に関しては三系統ほどの説が乱立しているのであるが、いずれも証明されていない。そこで本稿では、このイフシャビへの法律適用問題に焦点をしばって、最初の見通しをつけておきたいと思うのである。

- ① Hauanpox 1972, Cohomarba 1961, 二本＝一九八七、岡＝一九九四、同＝一九九八、同＝一九九八b等参照。奴隷身分の人々とは、平民が所有する隷属民のことである（二本＝一九八七参照）。

- ② Cohomarba 1961, pp. 112-120, Veeland 1957, pp. 9-121, 若松＝一九八七等参照。

- ③ 現在のフブスグルアイマクのダルハト族の土地（フブスグル湖西方の盆地）だけは、例外的にイフシャビのみが集住するジェブツンダンバの領地であった。

- ④ Itanab 1964, Cohomarba 1961, pp. 88-111等参照。

- ⑤ 『ハルハジロム』は、清朝治下に帰属する以前からハルハモンゴルの貴族たちが自ら制定し続けていた法律を、後に集成してまとめたモンゴル文の法典である。ただし一八世紀までの『ハルハジロム』の裁判記録が一切残っていないので、裁判の実態等は全く不明である。二本＝一九八三参照。

- ⑥ 「蒙古例」とは清朝政府によってモンゴル民族専用に満・漢・蒙三言語によって制定された法律の総称である。その時々が必要に応じて次々に制定される蒙古例は、乾隆年間には『蒙古律例』、嘉慶年間には

降は『理藩院則例』という法典に何度も集成され、そのたびに条文の追加・削除・訂正が行われた。島田＝一九八二、萩原＝一九九三等参照。

- ⑦ 内モンゴルではおそらくもっと早い時期から蒙古例が効力を持っていたであろう。

- ⑧ 氏自身、モンゴル文は読めなかった可能性が高い。清代以来のイフシャビの実態を知るモンゴル人から聞いた伝聞の可能性もあろう。

- ⑨ 「赤い頬を持つ」の意。本の表紙が赤い布で覆われていたためにこの名で呼ばれた。Hauanpox 1961 および Kanan-aaxav 1996 として出版されている。前者は、モンゴル国立図書館所蔵の一九二二年に書写されたという写本をモンゴル文字の活字に起こして出版した史料である。二冊が合冊された写本史料をそのままの順で印刷しており、前半に百八十五条（件）、後半に三百三条（件）の判例が収録されている。各判例は事件の内容とその判決が二・四行程度に短く要約されたもので、前半・後半の各々で年代順に並べてある。編者ナツアクトルジ氏も序文で述べているように写本段階での判例の脱落が少し見られる。この写本は一九一三年の判例を最後に含む（前記書写年代と矛

盾）ため完成はそれ以降のはずであるが、この写本以前にも『オラーンハツアルト』の前身とでもいうべき同様の判例集があったものと思われる。モンゴル国の研究者はその前身をも含めて『オラーンハツアルト』と呼ぶことが多い。なお、『オラーンハツアルト』の各判例条文（判決）の法的根拠はほとんど明記されていない。従って厳密な意味では、『オラーンハツアルト』は、『ハルハジロム』が適用された裁判の判例集である」と単純に一言で断定することはできない。勿論『オラーンハツアルト』は、『ハルハジロム』の判例集としての色彩を持つ史料ではあるが、その判例の法的根拠は『ハルハジロム』中の条文そのものよりもむしろシャンゾドバ衙門での法的な裁定の方に力点があり、より正確には『ハルハジロム』の影響を受けたシャンゾドバ衙門での判例集」とでも規定すべきであろう。さて、後者の *Ханга-аакха 1906* は、上記の合計四百八十八条の大部分を編者ジャランアージュブ氏が独自に第一章「刑事的側面を持つ種々の案件」と第二章「民事的および行政的側面を持つ種々の案件」とに分類し直した上でキリル文字モンゴル文へ転写再録したもので、*Hanropok 1906* に付された原写本の持つモンゴル数字の判例番号とは全く違う通算判例番号が新たに付されている。両者の番号が一致せず大変に不便であるのみならず、刑事と民事・行政との分け方もあまり判然とし

## 二、モンゴル国立歴史中央アルヒーブ所蔵清末シャンゾドバ衙門の裁判文書

上記の問題の解明に当たって本稿では、編纂史料ではなく刑事事件での実際の判決文、すなわち檔案史料そのものを利用したい。その際最も望ましいのは、清朝末期のエルデネシャンゾドバ衙門によるイフシャビへの刑事裁判の判決文であ

ない。また年号の記された判例を勝手に抜き去った後も「同年某月……」という判例をそのまま続けているため、年代に誤解が生じやすい。印刷間違いもかなりある。これらの問題を解決するために萩原<sup>11</sup>二〇〇一にて、ナツアクトルジ本とジャランアージュブ本の各判例の条文番号と年代との一覧表を作成した。参照されたい。

<sup>10</sup> 蒸した茶の葉や茎を圧搾してレンガ状に固めた茶の固まり。モンゴルではこれを貨幣のように使用していた。『オラーンハツアルト』では、*shab* という単位で記述されている。

<sup>11</sup> 窪田<sup>11</sup>一九八四。ただ氏は、残念ながらその一方でイフシャビとソムニアルトやハムジルガとの区別を明確に指摘せず、この併用説をハルハモンゴルの遊牧民全体に拡大解釈してしまった。またイフシャビ以外の一般牧民に対する裁判制度の研究が出る以前だったこともあり、裁判制度に関してもイフシャビの制度をハルハモンゴル遊牧民全体の制度へと拡大解釈してしまったようである。『オラーンハツアルト』に頻出するイフシャビの小規模な居住単位である「アイマク」（第三章の註④、⑤を参照）を、一般牧民が居住し多くの旗を内包する巨大な行政単位である「アイマク」（ハルハでは盟と同じ単位）と混同してしまったためであろう。



る。なぜなら、清朝帰属後の比較的早い時期においてイフシャビに『ハルハジロム』が適用されていたことは各説とも異論がないわけなので、清末におけるイフシャビへの刑事裁判を最初に検討すれば、清末でもなお『ハルハジロム』や『オランハツアルト』が適用されていたのか、それとも既に「蒙古例」に変わっていたのか、という最も重要な問題が効率よく確認できるからである。

さて、清代のハルハモンゴルにおける地方檔案史料は、大部分がウランバートルのモンゴル国立歴史中央アルヒーブに集められており、モンゴル人民共和国が民主化し始めた一九九〇年代初頭以降は外国人にも公開されているため、既に多数の研究者が檔案史料を閲覧利用している。このアルヒーブには、ハルハモンゴル族が清朝治下で大量の文書史料を残すようになった一八世紀後半以降、モンゴル人民共和国として完全に独立する二〇世紀に到るまでの長期間にわたる大量の公文書が所蔵されている。その内、清朝時代の檔案史料は約十三万件といわれ、大部分がモンゴル文か満洲文で書かれている。また清代の各文書は、元々それが保管されていた役所や寺院の名を整理単位として年代順に保管されているため、特定の役所で特定の時期に作成保管された檔案史料ばかりを集めることも比較的容易である（中見Ⅱ一九九二、萩原Ⅱ一九九四等参照）。筆者は、以前ここで文書調査をした（萩原Ⅱ一九九四参照）際、エルデネシャンゾドバ衙門によって作成保管された清末の檔案史料をも見ることができたので、その時見た数百通の文書の中から、刑事事件の判決やその原案（擬案）が記されていて法典名がはつきりと確認できる最も有効なモンゴル文の文書三通、つまり三つの事件だけを取り上げて本稿で検討することとしたい。

### 三、清末のイフシャビに対する刑事裁判の事例

#### a. オドセルとナワーンの事件（一八七七年）

まず最初にとりあげる事件は、光緒三（一八七七年）年一〇月一四日に、ハルハの東隣に当たる新バルガ八旗のヘルレン川（末尾の地図を参照）で起こった殺人事件で、犯人の名をとって仮に「オドセルとナワーンの事件」と名付けておく。この事件は、前述のモンゴル国立歴史中央アルヒーブ所蔵の文書番号「Φ.No.: M-85, T. No.: 2, X.H. No.: 722, (8-ryraap burun)」の文書に記述されている。この文書は折り本形式の横長のモンゴル文書で、残念ながら冒頭部分が破れて欠落している。しかし残存部分の行数だけでも計二百十七行あり大変に長く詳しいので、本稿では内容を要約するにとどめる。全文の転写和訳は、既に萩原Ⅱ二〇〇、八八一―一二頁で提示しているのでそれを参照されたい。

この事件の加害者は二人いて、その首犯は、ハルハ中央部のツェツェルレク盟（つまりサインノン部）のエルデネバンディダホトクト<sup>②</sup> (erdeni bandida qutuγtu) のシャビであるラマⅡオドセル (lama odsen) という人物であった。彼の犯行時の年齢は、数え三七才。加害者の従犯の方は、イフシャビで、チミドのオトクに所属しており、庫倫のウルルドアイマク<sup>④</sup>に住んでいたラマⅡナワーン (lama navang) という人物である。彼の年齢は犯行時、数え六一才であった。一方、殺された被害者は、ダシツェレンのオトク（本章の註<sup>③</sup>参照）に属するイフシャビで、もとは庫倫バルガイマク<sup>⑤</sup>に住んでいた僧、ダグバ (dayba) である。彼の年齢は文書に出てこず不明。

文書からうかがえるこの事件の簡略な経緯は、以下の通りである（末尾の地図を参照）。イフシャビである僧ダグバは、借金返済用に布施を請うべく庫倫から元の故郷である新バルガ八旗へ出かけ、大量の家畜や物品をバルガの人々から布施としてもらった。一方、オドセルは故郷エルデネバンディダホトクトの旗から巡礼に出て庫倫付近でイフシャビのナワ

ンと知り合い、意気投合して義兄弟のような仲となった。二人で計画して巡礼の許可を取り、山西省の五台山や北京方面へ向かう途中、布施を請おうということになって北東へ道を取り、ハルハから新バルガ八旗への境界線を密かに抜けて、その地で偶然ダグバと出会う。ダグバは初対面の二人を信用して、自分の得た布施を気前よく分配してやるが、オドセルはナワーンの同意を得た上で、ダグバの殺害と布施全部の横取りを計画した。オドセルは、両岸が凍りついて中央部を冷たい水が流れるヘルレン川へ、ダグバを乗っていた馬ごと突き落として殺害。布施を二人で横取りするが、境界線を越えてハルハへ逃亡する際に新バルガ八旗の鑲紅旗の官憲に捕えられて庫倫へ送り返される。ダグバとナワーンがイフシャビ、オドセルがツエツェル렉盟内のラマ旗のシャビだったので、エルデネシャンゾドバ衙門とツエツェル렉盟長の役所（庫倫での出張所）とが合同で裁判を開き、報告の文書がエルデネシャンゾドバ衙門から庫倫辦事大臣に提出されて、その控えとしてこの文書が衙門に保管された。この後、おそらく理藩院と皇帝の審理・裁可を経て、犯人二人が処罰されたはずである。

エルデネシャンゾドバ衙門による擬案を要約すると、〈この犯罪にうまく当てはまる適当な条文が「蒙古例」に見あたらないので庫倫辦事大臣による再審と擬案を請う〉というものであった（萩原Ⅱ二〇〇、一〇九―一一頁）。このタイプの擬案は、萩原Ⅱ一九八で扱ったイフシャビ以外の一般牧民の刑事事件と全く同じパターンなので、庫倫辦事大臣衙門や理藩院での裁判では、「蒙古例」に適当な条文が見当たらないという理由から以下の『大清律例』卷二一（刑律人命）の「謀殺人」の条が適用されることとなる可能性が大変に高いと筆者は考える。

凡謀（或謀諸心、或謀諸人）殺人、造意者、斬（監候）。從而加功者、絞（監候）。

もしもこの条文が適用されたとすれば、オドセルは斬刑。ナワーンは同意したものの全く助力はしていないので、死刑は免れるかもしれない。ただし、この文書から確認できるのは、あくまでイフシャビを殺したラマ旗のシャビとその殺人に同意したイフシャビに対してエルデネシャンゾドバとツエツェル렉盟長とが「蒙古例」を適用しようとしたという事

実のみであつて（これが本稿の最初の結論である）、その後の『大清律例』の適用は確認された訳ではない。ただ、両方の役所が判決に際して被害者と加害者のイフシャビ・シャビという身分をいささかも問題にしないまま平然と「蒙古例」に直接言及しているのは、注目すべきであろう。この事件では『ハルハジロム』も『オラーンハツアルト』も、エルデネシャンドバ衙門によつて全く言及されていないのである。

# b. ツェベクの事件（一九〇八年）

二件目の事例は、光緒三四（一九〇八）年三月二五日に発生したイフシャビ間の軽微な窃盗の案件である。この事件の経緯が記されている文書は、上記アルヒーブ所蔵の文書番号「Φ. No. : M-85, T. No. : 3, X.H. No. : 751, (15-lyraap ⑦Gurun)」という文書で、短いため次頁から全文の転写訳註を掲げる。訳文の（ ）内は訳者萩原による補足である（以下同じ）。この事件の加害者は、サンダクのオトクに所属し庫倫オーガイアイマク（本章の註③、④を参照）に住むツェベクという名のイフシャビで、被害者は、庫倫サンガイアイマク（本章の註④を参照）の僧サンドイという名のイフシャビであつた。ツェベクがサンドイの留守宅へ空き巣に入り小ハダク一枚とロシア貨幣四十枚を盗んだが、すぐ捕えられたという単純な事件である。犯人ツェベクに対してエルデネシャンドバが下した判決は、〈盗んだ物の価値が銀一両に達しないため、犯人は法律に従つて僧籍剝奪の上、鞭打ち六十回。賠償は必要なし〉という物であつた。

まずこの判決の内の僧籍剝奪というのは、犯罪にかかわつて拘束されたラマに必ず下されるありふれた処罰で、適用された法律は蒙古例を集成した法典である『理藩院（部）則例』巻五九（喇嘛事例四）の「喇嘛等犯罪、先行還俗」と題された以下の条文である。

一、凡喇嘛等因事拘審、先行革退喇嘛。（中略）如訊明無罪仍復其喇嘛。⑧

ちなみに『ハルハジロム』にも〈窃盗をしたラマの僧籍を剝奪せよ〉という規定はあるが、同時に〈「三・九」罰を課す〉⑨

(欄外)egüni 34 on 4 sarayin(日付が抜けている)sidken qayulbai  
これを(光緒)三四(一九〇八)年 四月 の 処置して写した。

- /1/ man-u küreyen-ü sangyai ayımay-un gelüng sangdui-yin yurban  
我々の庫倫 の サンガイ アイマクの 僧 サンドイの、三片の
- /2/ çilayun çai-u ün-e tayaçaqu sersi qaday nige orus mönggü  
磚 茶の 値段に当たる 小 ハダク 一枚とロシア貨幣
- /3/ döçi-tei-i qulayuju bariydaysan quljai çebeg-i kereg  
四十枚とを盗んで 捕えられた 盗人 ツェベクを事件に
- /4/ tokiyaysan kümün-luy-a ama niyur uçarayulun bayiçayan  
遭遇した(被害) 者 と 口供や顔を 照合し 調査して
- /5/ sigübesü kereg tokiyaysan gelüng sangdui-yin medegülkü anu  
裁くと、事件に遭遇した 僧 サンドイの 供述は(以下の通りであった。)
- /6/ ene jıl yurban sarayin qorin tabun-u edüre qural-du  
「今年 三 月 の 二十五 日、(読経) 会 に
- /7/ quraysan çilügen-dü çouji ügei qasiyan-u qayaly-a-bar  
集まったすき に 鍵をかけていない板囲いの 戸口 から
- /8/ quljai kümün oruji minu qubi-yin sersi qaday nige, orus  
盗 人が 入り、私 個人の 小 ハダク一枚とロシア
- /9/ mönggü döçi-tei-i qulyun abaçu yaraq-yin jabsar bi tokiyalduju  
貨幣 四十枚とを盗み 取って出る 間に、私が出くわし  
(jiseged の誤りとみなす)
- /10/ jisüged qaday mönggü jereg-i toýabar qurayan abçu quljai-yin biy-e-i  
監視してハダクと貨幣 などを 数通り 回 収し 盗人 の 身柄を
- /11/ bariyad kürgen iribei sigün sidkegütkü-eçe öber yomuduju temçekü jüil  
捕えて 届けて来ました。裁き 処罰すること以外には訴え 争う ことは  
ügei  
ありません」
- /12/ kemen medegülümü quljai çebeg-yin öçikü anu şabi  
と 供述している。盗人 ツェベクの供述 は(以下の通り。)[(私は)シャビ  
daruy-a sangday otuy-un  
長 サンダクのオトクの]
- /13/ kümün ene jıl qorin dörben nasu eçege lubsang kedüyün ükkügsen  
者です。今年 二十 四 才です。父 ロブサンはずっと以前に死にました。  
eke çibyanča  
母たる尼
- /14/ dejid-yin qamtu ouyai ayımay-tu sayuju qural nom-un suryayuli-i dayaju  
デジドと 共に オーガイアイマクに住み、 読 経 学校 に従って
- /15/ aju törümüi ene jıl yurban sarayin qorin tabun-u edüre gendte qulyuqu  
暮らしています。今年 三 月 の 二十五 日に 突然 盗みの  
sanay-a törüju  
考えが 生じ、

- /16/ yaŋčayar yabuŋu sangyai ayimay-un gelüŋ sangdui-yin čouji ügei  
 一人で 出かけてサンガイアイマクの僧 サンドイの、鍵のかかっていない  
qasiyan-u qayaly-a-bar  
 板囲いの 戸口 から
- /17/ oruju tegünü ger-eče ile bayiŋsan sersi qaday nige  
 入り、彼の 天幕から、むき出しで置いてあった小 ハダク一枚と
- /18/ orus mönggü döči-tei-i qulyun abuyad qasiyan-u yadan-a yaraq uabsar  
 ロシア貨幣 四十枚とを盗み 取り、板囲いの 外 へ 出る 間に、
- /19/ kereg tokiyaysan gelüŋ sangdui tokiyalduju sersi  
 事件に遭遇した(被害者の)僧 サンドイが(私に)出くわし、小ハダクや  
mönggü jerge-i toyabar qurayan  
 貨幣 などを数の通りに回
- /20/ abaču minu biy-e-i bariyad kürgen irigsen bile bi egünče urid quljai bolun  
 収し、私の 身柄を 捕えて 届けて 来たのです。私はこれ以 前に 盗人 で
- /21/ yabuŋsan ba edüge qulyuqui-dur ögür qorsiy-a ügei kemen  
 あったことはなく、今回の窃盗でも 他の仲間 は いません」と  
öčimüi, bayičayabasu  
 供述している。調べてみると、
- /22/ ene kereg tokiyaysan kümün-i medegülge quljai-yin öčig jabsar-tur  
 この事件に遭遇した 人 の 報告と 盗人 の 供述は、相  
qarilčan neyilelčegsen böged  
 互に 一致して いて
- /23/ qulayuyŋsan yayum-a-ni ün-e nige lang-du ülü kürülčeki-yin tula quljai  
 盗んだ 物 の 価値が(銀)一 両 に 達しない ため、盗人  
čebeg-i  
 ツェベクを
- (sibtulju に同じ)
- /24/ qauli yosuyar šara-i šabtulju jiran tasiyur jaŋčisuyai, qulayuyŋsan mönggü  
 法律に従って 僧籍を剥奪し、六十回鞭 打とう。 盗んだ 貨幣と  
qaday-i  
 ハダクを
- /25/ kereg tokiyaysan kümün öngge toyabar quriyaysan-i ülü kelelčesügei  
 事件に遭遇した 人が、種類と数の通りに回収したのを話し合う必要なしと  
 しよう。
- /26/ nigen kereg-i eyimü sidkegsen yabudal-i dangsan-a temdeglebe,  
 一 件 を このように処置した こと を 檔案 に 記録した。

ことになっているので、この判決には合わない。またその直後にも「ラマが羊一頭よりも安価な物を盗んだ場合」という規定があるが、こちらは同時に「僧籍剝奪をラマ自身の希望にゆだねる」となっている<sup>⑩</sup>ので、「法律に従って僧籍を剝奪する」、つまり僧侶の希望いかんにかかわらず無条件で剝奪するというここでの判決にはやはり合わない。従ってこの僧籍剝奪に「蒙古例」が適用されたことは、確実である。

また判決の中心部分「銀一両以下の価値の物を盗めば鞭六十回」というのは『ハルハジロム』にも「蒙古例」にも該当する条文が見当たらないが、実は『大清律例』巻二〇（刑律賊盜下）の「窃盜」に、うまく一致する以下の条文が存在し、かつモンゴルでのイフシャビ以外の一般牧民に対する刑事裁判でも適用された例が既に知られている（萩原Ⅱ一九八八、二三頁、同Ⅱ二〇〇〇、一一八頁参照）。

凡窃盜已行而不得財、笞五十、免刺。（中略）一兩以下、杖六十。一兩以上至一十兩、（以下略）

この傍線部の「窃盜した物品の価値が銀一兩以下であれば犯人を杖六十に処す」という規定は、ここでの判決にぴったりと一致しており、杖を革製の鞭（むち）に読み替えるのもモンゴルで普通に見られることである（萩原Ⅱ一九八八、一三三頁、同Ⅱ二〇〇〇、一一八頁の例でも同じ）。従ってこの案件では、イフシャビから安価な物を盗んだイフシャビに対してエルデネシャンゾドバが「蒙古例」と『大清律例』とを適用したことがはっきりと確認された。これが本稿の第二番目の結論である。

### c. セレーネンドルジの事件（一九〇八年）

三件目の事例は、光緒三四（一九〇八）年一月二日に発生したイフシャビがイフシャビでない人を殴った事件である。この事件の文書も前記アルヒーブ所蔵で、文書番号は「Ф. No. : М-85, Т. No. : 3, X.H. No. : 751, (10-дѣлаар бичир)」。短いのでこれも次頁から全文の転写訳註を掲げておく。

- (欄外)egni 34 on 11 sarayin(日付が抜けている)sidken bičibei  
これを(光緒)三四(一九〇八)年 一 月 の 処置して書いた。
- /1/ tūsiyetü qan-u qosiyun-u qoriyan-u daruy-a duyar-i  
トゥシェートハン 旗 の 区 長<sup>③</sup> ドガルを
- /2/ niduryalan ǰangčiysan sitügen-i ayimay-un kiy-a lama  
拳で 殴った シュテーン アイマクの侍衛 ラマ、
- /3/ sereyineng-yin kereg-i neyilegülin bayičayaǰu sigübestü  
セレーネンの 事件を 合わせ 調べて 裁くと、
- /4/ daruy-a duyar-yin medegülkü anu ene arban nigen sarayin  
長 ドガルの 報告 は(以下の通りであった。)にの十 一 月 の
- /5/ sineyin qoyar-yin edür čouqur qoriyan-u ǰaǰar sayuqu  
初 二 日、チョーホル区 の 場所に住む
- /6/ sayid beyise-yin qosiyun-u bangdi torumun-yin degüü  
大臣 貝子 の 旗 のバンディ<sup>④</sup>、トロモンの 妹
- /7/ keüken-ü ger-tü nom ungsiysan kiy-a lama sereyineng man-u  
の天幕で経を 読んだ 侍衛 ラマ、セレーネンが、我々の
- /8/ qasiyan-u egüüden-dü baling tülighsen uçir qasiyan-dur  
板囲いの 扉の所 で 小麦粉の供え物を燃やしたので、板囲い に
- /9/ ǰal qaldaqu aqui kemen ayilabarlarn uçir-i keleküi-dür  
火がつく か と 恐れて 事情を話すと、
- /10/ sereyineng yekede ayursaju minu niyur-yin tus nigen uday-a  
セレーネンは大いに 怒り、 私の 顔 に 対して一 度  
(qabudaju の誤りとみなす)
- /11/ niduryalan ǰangčiysan tuqai-dur yekede qabaddaču ulayıysan  
拳で 殴った 時 に 大いに 腫れて 赤くなりました。
- /12/ bolbaču ene ǰabsar-a nigengte sayin-iyar edegegsen böged  
しかし、この間 既に よく 回復して いて、
- /13/ yerü emgeglegsен ǰaǰar ügei tula sereyineng-i sidkegütkü-eče  
全く 痛む 所が ないので、セレーネンを処罰させる以
- /14/ öber yomudaqu ǰülil ügei bile kemen medegülümüi,  
外に 訴える ことはありません」と 報告している。
- /15/ küriyen-ü sitügen-i ayimay-un kiy-a lama sereyinengdorǰi-yin  
庫倫 のシュテーンアイマクの侍衛 ラマ、セレーネンドルジの
- /16/ medegülkü anu öčügen kümün ene ǰil ebül-ün dumda sarayin  
報告 は(以下の通り。)[小人(たる私)は今 年 冬 の 中の(一)月の
- /17/ sineyin qoyar-yin edüre čouqur qoriyan-u ǰaǰar-a sayuqu  
初 二 日に、チョーホル区 の 所に住む
- /18/ sayid beyise-yin qosiyun-u bangdi torumun-yin degüü  
大臣 貝子 の 旗 のバンディ、トロモンの 妹



- (dayaldun の誤り)
- /19/ keüken-i ger-tü bayşı gabju ligčuy-i dayldun nom ungsiqu  
の天幕で、先生 ガチュリンチョクに従って 経を読む
- /20/ učir sayuran ĵisay-a ba dongdoblig ayimay-ača payıja  
ために規則的勤行(?) や ドンドブリグアイマク(?)から札を
- /21/ abču očiýad nom ungsiýsan tuqai-dur nigen doýjur  
持って行き、経を読んだ 時 に 一つの小麦粉の供え物を
- /22/ yaryažu daruy-a duýar-yin qasiyan-u emün-e eteged-tür  
出して、長 ドガルの 板囲いの 前の 側 で
- /23/ qayilqui-dur eseregü teseregü kelelčekü-yin ulama minu mungqay  
茶毘に付す際、対 立して 話し合った 上に 私の 愚かな  
(örniju の誤りとみなす)
- /24/ ayur genedte öreniju duýar-yin niýur-yin tus niduryalan  
怒りが突然 増大し、ドガルの 顔 に 対して拳で
- /25/ ĵangčišan ünén kemen medegüljüktüi, egündür eden-ü medegülge  
殴ったことは本当です」と 報告した。 その際、 彼等の 報告は
- /26/ qarılčan neýilelčegsen ba, ĵangčiydaysan duýar nigengte  
相互に 一致していて、 殴られた ドガルも既に
- /27/ sayin-iyar edegegsen büged yerü emgeglegsén yaǵar ügei tula  
よく 回復して おり、全く 痛む 所がないので、
- /28/ ene kereg-ün kiy-a lama sereyinengdorǵı-i tusiyał-dur kebyier  
この事件 の 侍衛 ラマ、セレーネンドルジをその地位に そのまま
- /29/ ayuyulažu urid sidkegsen kereg-ün yosuyar angžu  
居らせ、 以前処罰した 事件に 従って アンズ
- /30/ nigen yisün yal-a toryužu čegerlel üjegülün sidkegsen yabudal-i  
一・九 罰を 課して 禁例を 示して 処罰した こと を
- /31/ dangsan-a temdeglebe,  
檔案 に 記録した®

この事件の加害者はイフシャビで、庫倫シュテインアイマク（本章の註④参照）の侍衛ラマであるセレーネンドルジ。被害者はハンオール盟トウシェート汗旗の区長という地位にあったダガルという人物で、おそらくソムニアルトであったと思われる。一般の旗の人なので、少なくともイフシャビではない。事件の内容は、セレーネンドルジが口論の末にダガルの顔を拳で殴ったという単純なものである。

エルデネシャンゾドバによる判決の内容は、「以前処罰した事件に従ってアンズ一・九罰を課す」というものであった。まず、「以前処罰した事件に従って」という文言は極めて異例な表現である。ソムニアルトやハムジルガの裁判の判決においては必ずといってよいほど、法典名が直接言及されるか、あるいは例えば「法律に従って……を課す」というようにいずれかの法典に則って処置しようとしている合法性が明瞭に読みとれるよう意識して書かれた文言になるのが普通である。このように、前例に則って処罰するという明らかに判例の存在を暗示するような文言は、イフシャビ以外の裁判ではまず考えられないであろう。判例集『オラーンハツアルト』との関連を示唆しているかのようなのである。そしてまたアンズという語が使われているのも、極めて異例である。この語は、モンゴル語で比較的軽い刑罰を意味する用語であるが、かなり古い言葉で、元々漢文表記である『大清律例』は勿論のこと、蒙文版の「蒙古例」でも使用されていない。逆に『ハルハジロム』や『オラーンハツアルト』では、重い刑罰を指すと思われる用語ゼレグレン (Jereglen) と並んでアンズの語が頻出する。従って『ハルハジロム』か『オラーンハツアルト』が適用された可能性を強く示唆する語であるともいえる。最後の「一・九罰」とは、九頭の家畜を一セット、犯人からシャンゾドバ衙門に没収するという意味で、「蒙古例」でも『ハルハジロム』でも『オラーンハツアルト』でも頻繁に現れる家畜による罰金刑である。<sup>⑩</sup>

さてそこで、人の顔を拳（こぶし）で殴ったという単純な傷害事件について、まず清末期の「蒙古例」を調べてみると、『理藩院（部）則例』卷三五「人命」の「修改 蒙古属下官員等擅用金刃等物傷人殺人」の条文中に、

一、凡蒙古属下官員及平人、擅用金刃等物傷人者、（中略）平人鞭一百。（中略）其並非擅用金刃、以手足他物、傷人（中略）各

減損用金刃例一等科罪。(以下略)<sup>⑩</sup>

という規定が見つかる。傍線部に、「刃物を用いずに手足等を用いて人を傷つけた場合は(中略)各々刃物を用いた例よりも罪一等を減ずる」と書かれていて、最初の方にある平民が刃物を用いて人を傷つけた場合の規定では「鞭一百」となっている。結局「蒙古例」では百回よりも回数を減らされた鞭打ちということになる。<sup>⑪</sup>これはこの事件の刑罰「一・九罰」とは何の関係もないので、ここで「蒙古例」が適用された可能性はない。

次いで『ハルハジロム』を調べてみると、拳で人を殴った場合という規定が見当たらない。しいてこれに近い規定を探せば、まず〈使者を鞭や拳で打てば五罰に加えて二罰<sup>⑫</sup>〉という規定が見つかるが、被害者の条件も処罰方法もこの案件に合わない。また〈盗人が家畜の持ち主を石や木で殴った場合三・九罰に処す〉という規定も見つかるが、<sup>⑬</sup>加害者の条件も殴り方も、また処罰方法も全てこの事件に合わない。さらに〈他人の親指を傷つけて、もしもその機能が回復したならば一・九罰、親指以外の指を傷つけてその機能が回復しなければこれも一・九罰に処す〉という規定も見つかるが、やはり顔を殴ったこの事件で適用されたところにつけるのには無理がある。従って『ハルハジロム』がここで適用されたとも考え難い。そこで『オランハツァルト』を検索してみると、類似の判例がかなり見られる。例えば、〈拳で人を殴った犯人をアンスー・九罰を課して処罰した〉というこの事件と全く同じ判例が二件見られる。一件目はHaurropk 1961, p. 25にある判例前半部(第一部)の第五三条(以下、萩原二〇〇一の方法で編者名の頭文字・条文番号・頁を採ってH-I-53, p. 25というふうに略す。本稿第一章の註⑨を参照)で、これはKarataaakab 1996, p. 11にある第三六条(同様にK-36, p. 11)に当たる。二件目はHaurropk 1961, p. 94にある判例後半部(第二部)の第九四条(H-I-94, p. 94)で、K-160, p. 23に当たる。さらに、殴った手段を明示しないまま〈人を殴った犯人を一・九罰を課して処罰した〉とする判例ならば五件も見られる。<sup>⑭</sup>その上、以上七件の内最後の一件を除く六件の判例はいずれも「angju nigen yisün yal-a torjuju sidkejukui, (アンスー・九罰を課して処罰した)」という文言になっており、「angju」の語の使われ方を含めて明らかに「セレーネンドル

ジの事件」の判決文にそっくりの言い回しである。こうして考えてみると、前述の「以前処罰した事件に従って」という判決の文言も、やはり明らかにこれら『オランハツアルト』の判例に従った故の表現であるとしか考えられない。

以上の検討から「セレーネンドルジの事件」に『オランハツアルト』の中のいずれかの判例（おそらく複数）が適用されたとはほぼ断定して良いであろう。勿論、我々が現在見ている『オランハツアルト』は、第一章の註⑨で述べたように一九一三年以降に完成したものであるから、一九〇八年の「セレーネンドルジの事件」にこの完成本そのものが適用された可能性はない。しかし、現在の『オランハツアルト』に収録されている一九〇八年以前の判例もこの事件当時当然何らかの形で判例として存在していたはずなので、そこから適用されたはずだということである。これが本稿の第三番目の結論である。またこれによって、『オランハツアルト』に清末の判例が含まれているという以前からわかっていた事実が、確かに含まれていても不思議ではないと改めて再認定されたことにもなる。

- ① 「Φ. No. : M-85」 とは、「Φонд Number (蔵書番号)」が M-85 である」という意味。M-85 の M は満洲族時代（つまり清代）を表す Manchu (満洲族) の頭文字 M であり、その 85 はエルテネシヤンゾドバ衙門の文書である。「T. No. : 2」 とは、「Товар. Number (帳簿番号)」が 2 である」という意味。M-85 は No. 3 まであって、No. 1 は檔冊群。この No. 2 と No. 3 は折り本形式の文書群である。「X. H. No. : 722」 とは、「Харанакшин Харк. Number (保管単位番号)」が 722 である」という意味。ここまでは本当の文書番号。(8-й ярус бумаж.) は「第八文書」の意で、わかりやすいように筆者が付け加えただけである。No. 722 は至十通の文書からなるので、その内の八通目ということ。

- ② この活仏はラマ旗を所有する有印の活仏であった（末尾の地図を参照）。詳細については若松＝一九八七等を参照。

- ③ オトクの名は一般に人名や地名を前に冠して呼ばれる。このチミドというのは人名で、いかなる人物であったのかははっきりしないが、このオトクを当時管轄していた役人の名である可能性も高い。

- ④ ウルルードは本来氏族名で、この氏族出身のイフシャビ（ラマを含む）がアイマクと呼ばれる小集団を形成して庫倫に集住していたもの。庫倫にはアイマクと呼ばれるイフシャビの小さな組織が三十個あり、各地から集まったジェブツンタンバホクトク配下のイフシャビたちが集住して暮らしつつ仏教の修行などをしていた。この組織を「庫倫のアイマク」と呼ぶ。本章で引用する他の二事件に出てくる「サンガイアイマク」、「オーガイアイマク」、「シュテーンアイマク」も、この「庫倫のアイマク」の一つと思われる。Chonkharba 1961, p. 102 等参照。ウルルードという氏族名は、現代モンゴル語の辞書にも記載されており、Pirvich 1979 の第六一枚目の氏族分布地図に記載されて

いる「[HvH]」に当たると思われる。リンチエン氏の地図によれば、彼らは現在でもモンゴル国北西部のフスグルアイマク方面に居住しているようである。

- ⑤ バルガ族は、現在も中国の内蒙古自治区北部のフルンボル盟西部一帯に居住遊牧しているモンゴル系の部族で、西方の新バルガ族と東北方の旧バルガ族とに別れている。庫倫バルガイマクとは、ウルルードアイマクと同様に、バルガ族出身のイフシャビが庫倫でアイマクと呼ばれる小集団を形成して集住していたものである。この場合のバルガ族はイフシャビがいてチベット仏教に対する信仰がかなり篤かった人々のはずなので、旧バルガ族ではなくハルハのすぐ東隣に住む新バルガ族であつた可能性が高いと思われる。一方この殺人事件が起こつた場所は、ヘルレン川の岸辺なので、明らかに新バルガ八旗の地である。従つてダグバは自分の出身地かあるいは祖先の出身地に行つて布施を請うたことになろう（末尾の地図を参照）。バルガ族に関しては、柳澤Ⅱ一九九三、同Ⅱ一九九九等を参照。

- ⑥ 殺人が発覚して捕えられたのか、あるいは単に許可なく境界線を越えたために捕えられたのか、文書からは読みとれない。ただ後者だとしても捕えられた後すぐに発覚した可能性が高い。

- ⑦ 本章の註①を参照。M-85 of T. No. 3 まであり、No. 1 は檔冊群。33 は折本の文書群。X.H. No.: 751 の No. 751 は全二二通の文書からなり、本文書はそのうちの二五通目である。

- ⑧ 細長い絹布。贈り物に用いられる。

- ⑨ 多傑才旦Ⅱ一九八七の巻五九の八葉表（下帙）、楊選第・金峰Ⅱ一九九八、四一五―四一六頁等参照。蒙文版では尼日拉圖・金峰Ⅱ一九八九、七八〇頁（下巻）等参照。

- ⑩ この種の家畜罰については次の事件の所で解説する。

- ⑪ 「ハルハジロム」のこれらの規定について、ロシア語訳とモンゴル文テキストとは、Iltisikov 1965, p. 56, 229-230 を参照。和訳は田山Ⅱ一九六七、二五四頁を参照。

- ⑫ 本章の註①、⑦参照。本文書は二二通中の二〇通目である。

- ⑬ トウシエートハン旗とは、ハンオール盟（トウシエート汗部）内にありトウシエート汗の地位にある王侯の旗である。この区長というのがいかなる役職であるのか詳細は不明であるが、旗の領地ではなく庫倫における役職であると思われる。

- ⑭ 大臣貝子というのは誰のことか不明。バンディとは下級ラマのこと。檔案に記録したということは、これが公式的な処罰であることを示しているであろう。

- ⑮ 九頭の内訳は、「蒙古例」では「馬二頭・去勢牛二頭・乳牛二頭・三歳牛二頭・二歳牛一頭」。「ハルハジロム」でも最後の二歳牛が一歳牛に変わるだけで、ほぼ同じである。「二・九罰」とは二セツト（計十八頭）、「三・九罰」とは三セツト（計二十七頭）の家畜罰で、九頭に満たない「七罰」「五罰」「三罰」等もあった。島田Ⅱ一九九二、八四四―八五五頁等参照。ただし「オランハツアルト」の規定（Haanopk 1961, p. 13）では、アンズー・九罰は磚茶一二〇〇個に換算されることになっている。

- ⑯ 多傑才旦Ⅱ一九八七の巻三五の四葉裏・五葉表（下帙）、楊選第・金峰Ⅱ一九九八、三〇七頁等参照。蒙文版では尼日拉圖・金峰Ⅱ一九八九、五八一―五八二頁（下巻）等参照。

- ⑰ ちなみにこれは、被害者に障害が残らなかった場合の規定であつて、障害が残った場合の規定は、引用文中の二つ目の（中略）の部分に、より重い刑罰が記述されている。この事件では被害者の傷がよく治つたと記されているので、障害の残らなかった方の規定が関わる。

⑮ 五罰と二罰に関しては、本章の註⑮を参照。  
 ⑯ ロシア語訳とモンゴル文テキストとは、Данников 1965, p. 23, 145を参照。和訳は田山＝一九六七、二二二頁を参照。ただし田山氏の訳は誤脱もあるので注意が必要。

⑰ ロシア語訳とモンゴル文テキストとは、Данников 1965, p. 30, 159を参照。和訳は田山＝一九六七、二二〇頁を参照。ただし田山氏の訳は「三・九」を誤って「一・九」と訳している。本章の註⑮も参照。

⑱ ロシア語訳とモンゴル文テキストとは、Данников 1965, p. 70, 264を参照。和訳は田山＝一九六七、二六九頁を参照。本章の註⑮も参照。

⑲ [H-I-33, p. 21, Ж-22, p. 10°] [H-I-157, p. 48, Ж-89, p. 16°] [H-II-23, p. 78, Ж-119, p. 19°] [H-II-178, p. 111, Ж-202, p. 27°]

[H-I-218, p. 119, Ж-224, p. 29°]

⑳ 念のために述べておくと、上記の判例計七件も細かい条件は様々だったようで、五件目はイフシャビが漢人を殴った案件だし、六件目は相手の歯を折り、七件目は目をつぶしてしまったにもかかわらず、一様に「一・九罰」に処している。これらが何故同じ処罰になったのか、わずかに数行の叙述からは状況が全く読みとれない。またそれ以外に、拳で殴ったにもかかわらずより重く処罰された判例が三件〔8〕

#### 四、清末のイフシャビに適用されていた法律

以上三つの事件の法律確定結果をふまえて、本稿の第一章のbで最初に述べた主要な三系統の学説をここで再検討してみよう。まずリヤザノフスキー氏の『「ハルハジロム」説』について。エルデネシャンゾドバ衙門は、イフシャビ間で起

H-I-20, p. 19, Ж-15, p. 9° [H-I-111, p. 38, Ж-66, p. 14°] [H-II-144, p. 104, Ж-181, p. 25°] より軽く処罰された判例が三件〔11〕 [H-II-93, p. 94, Ж-159, p. 23°] [H-II-168, p. 109, Ж-198, p. 27°] さらに拳以外の手段で殴ったり殴った手段が明記されないままより重く処罰された判例が四件〔12〕 [H-I-41, p. 23, Ж-28, p. 10°] [H-I-146, p. 46, Ж-82, p. 15°] [H-I-155, p. 47, Ж-87, p. 16°] [H-I-168, p. 50, Ж-93, p. 16°] より軽く処罰された判例が六件〔13〕 [H-II-42, p. 82, Ж-129, p. 20°] [H-II-78, p. 90, Ж-147, p. 22°] [H-II-134, p. 102, Ж-175, p. 24°] [H-II-156, p. 106, Ж-188, p. 26°] [H-II-158, p. 107, Ж-190, p. 26°] [H-II-213, p. 118, Ж-221, p. 29°] ある。これらの多様な判例の存在は「本事件への『オランハント』の判例の適用を想定するのに一見不利だと思われるかもしれないが、鞭〔14〕や木〔15〕で殴ったためにより重くなった場合や父親（尊属）を殴ったためにより重くなった場合〔16〕、普通の喧嘩〔17〕や夫婦喧嘩〔18〕で殴ったためにより軽くなった場合など、その根拠が読みとれるものも少なくないので、人を殴ったというだけでは片づけられない事件の個別的な状況によって軽重が裁量されたものと考えられる。従ってこのような処罰のばらつきは、決して『オランハント』の判例が本件に適用されたという結論にさしさわるものではないと筆者は考える。

こった「ツェベクの事件」でイフシャビに「蒙古例」と『大清律例』を直接適用し、「オドセルとナワーンの事件」でもラマ旗のシャビとイフシャビとに「蒙古例」を適用しようとしている。従って、『ハルハジロム』説は明らかに成り立たない。

次いで島田正郎氏の〈『ハルハジロム』から「蒙古例」への交代説〉も、〈『ハルハジロム』のみのところへ「蒙古例」や『大清律例』が徐々に浸透していった〉という意味では勿論正しかったが、清末の「セレーネンドルジの事件」においても『オラーンハツアルト』の判例がなお公式的に適用されていることから、〈清朝の法へ交代しきつた訳ではなく、清末でも『オラーンハツアルト』がなお併用されていた〉と訂正せざるを得ない。これは『オラーンハツアルト』中の清末の判例からもある程度予測され得たことではあるが、ここで改めてはっきりと確認できたわけである。

続いてジャランアージャブ氏による〈『ハルハジロム』と『オラーンハツアルト』のみの併用説〉は、「『ハルハジロム』説」と同じ理由で明らかに成り立たない。イフシャビ間の「ツェベクの事件」で「蒙古例」と『大清律例』が適用されているからである。ナツァクドルジ氏による〈他盟の牧民との相關案件では「蒙古例」だけ、イフシャビのみの案件では『ハルハジロム』と『オラーンハツアルト』の併用〉という説も、他盟の牧民との相關案件である「セレーネンドルジの事件」で『オラーンハツアルト』の判例が適用され、イフシャビのみの「ツェベクの事件」で「蒙古例」と『大清律例』が適用されているという全く正反対の事実から、ここにもろくも崩れ去る。少なくとも氏の考えたような整然とした使い分けは存在しなかったということである。最後にソノムダグバ氏による〈『ハルハジロム』と『オラーンハツアルト』が併用されつつも重大な案件のみは清朝の法〉という説までも、イフシャビ間の軽微な窃盗案件である「ツェベクの事件」で清朝の法が適用されていることから、正しいとは言い難い。軽微な案件でも清朝の法が適用され得たわけである。以上、従来の学説は全て、誤りであるかあるいは不正確であったと結論せざるを得ないであろう。

結局本稿での検討を通して、エルデネシャンゾドバ衙門によるイフシャビの裁判においては、少なくとも清代の末頃に

は「蒙古例」と『大清律例』とが既に導入されていて刑罰の軽重にかかわらず確実な効力を有していたという事実と、『オランハツアルト』の判例が清末でもなお効力を持ち続けていたという事実とが明らかになった。すなわちイフシャビに対する法律は、ソムニアルトやハムジルガの場合と同じように清朝の法への推移が起こったけれども、完全に交代しきるまでには到らなかったということであり、いいかえれば、清朝による司法支配はイフシャビに対しても浸透したが、完全に徹底された訳ではなく、清末でもなお民族自治のような側面が少しは残されていたということである。以上が本稿の主要な結論である。

あとは、モンゴルの法（『ハルハジロム』・『オランハツアルト』）と清朝の法（『蒙古例』・『大清律例』）との使い分けがどのようなになされていたのかという問題がなお残るが、これに関して筆者は現在の所、刑罰の重い案件には主として清朝の法が適用され、軽微な案件にはモンゴルの法と清朝の法とが併用されていたのではないかと推定している。その根拠の一つは『オランハツアルト』の判例の中に死刑や流刑等の重い刑罰を伴う判例が存在しないことであるが、この点はなおより詳細な研究が必要であろう。また『ハルハジロム』からの直接適用が清末の段階でもまだあったのかどうか、もしもなかったとすればいつ頃まであったのか、などの問題は、なお未解決である。

### おわりに

最後に今後の課題をあげておきたい。まず前述のように、イフシャビの裁判におけるモンゴルの法と清朝の法との使い分けの基準を明らかにすること。次いで『オランハツアルト』の正確な訳註を出してその位置づけや史料価値を明確化すること。また清中期以降の『ハルハジロム』の直接的効力の有無や、イフシャビの間に（つまりシャンドバ衙門での裁判に）『蒙古例』と『大清律例』が浸透していった時期を探ること。その際、イフシャビ以外の一般牧民よりも遅いのかあるいは同じなのが重要である。さらにイフシャビの詳しい裁判手続きと裁判機構の詳細、言い換えるとエルデネシャ



ンゾドバ衙門や各地のオトクのザイサン組織・機能の解明、次いで中小活仏のシャビに対する裁判の実証研究などがさらにその先の課題となろう。

### 主要参考文献 和文中文蒙文文献

- 岡 洋樹Ⅱ一九九四・「ホヴド・オオルト旗の成立——乾隆期中葉におけるザサク旗に関する一考察——」(『松村潤先生古希記念清代史論叢』汲古書院、九五—一〇八頁)
- 一九九八・「清代ハルハ・モンゴルの比丁冊」(『東北大学東北アジア研究センター』『東北アジア研究』二、二二—三三四頁)
- 一九九九a・「清代モンゴル・ザサク旗官制について——外モンゴル・ハルハ・セツェンⅡハン部中末旗を事例として——」(『集刊東洋学』八一、一—一八頁)
- 一九九九b・「清代ハルハ・モンゴルにおけるタイジと隨丁——ハルハ東路セツェンⅡハン部中末旗を事例として——」(『東北大学国際文化学会』『国際文化研究』六、二九—四三三頁)
- 窪田新一Ⅱ一九八四・「『オラーンⅡハツアルト』にみる18・19世紀モンゴルの裁判制度」(『大正大学大学院研究論集』八、一八三—一九二頁)
- 滋賀秀三Ⅲ一九八四・「清代中国の法と裁判」創文社、四百一頁
- 島田正郎Ⅱ一九八〇・「清末における近代的法典の編纂——東洋法史論集第三——」創文社、四百十三頁
- 一九八一・「北方ユーラシア法系の研究——東洋法史論集第四——」創文社、五百八頁
- 一九八二・「清朝蒙古例の研究——東洋法史論集第五——」創文社、九百三十八頁
- 一九八六・「清末清初モンゴル法の研究——東洋法史論集第六——」創文社、七百四十八頁
- 一九九二・「清朝蒙古例の実効性の研究——東洋法史論集第七——」創文社、三百八十八頁
- 一九九五・「北方ユーラシア法系通史」創文社、百八十二頁
- 多傑才旦(編)Ⅱ一九八七・「欽定理藩部則例」中国蔵学出版社、三帙計十八冊、影印版
- 田山 茂Ⅱ一九六七・「蒙古法典の研究」日本学術振興会、三百頁
- 中見立夫Ⅱ一九九二・「モンゴル研究 世界に窓」(『朝日新聞』一九九二年一月二二日付刊)
- 尼日拉図・金峰(校注)Ⅱ一九八九・「理藩院則例(上・下)」(『蒙文活字組版』内蒙古文化出版社、上下計九百二頁)
- 萩原 守Ⅱ一九八八・「清代モンゴルにおける刑事的裁判の事例——清朝蒙古例、実効性の証明を中心にして——」(『史学雑誌』九七—一二、一—三八頁)
- 一九九〇・「一八世紀ハルハ・モンゴルにおける法律の推移」(『東洋史研究』四九—三、一一四—一三八頁)

- 一九九三・「清朝の蒙古例——『蒙古律例』『理藩院則例』他」（滋賀秀三編『中国法制史——基本史料の研究』東京大学出版会、六二三―六五六頁）
- 一九九四・「清代モンゴルの法制史に関する研究——地方裁判文書へのアプローチ——」（『三島海雲記念財団研究報告書』平成五年度（第三号）、一一七―二〇頁）
- 一九九五・「清朝蒙古例の淵源の一形態——北京図書館所蔵モンゴル文法規『崇徳三年軍律』を手がかりにして——」（『東洋学報』七六―三・四、三三―五九頁）
- 二〇〇〇・「清代モンゴルにおける裁判文書・裁判制度の研究」平成九年度―平成一一年度文部省科学研究費補助基金盤研究（c）（2）研究成果報告書、百一十六頁
- 二〇〇一・「『ハルハジロム』の判例集『オラーンハツアルト』に収録されている判例の条文番号整理」（文部省科学研究費補助基金盤研究（A）（2）研究成果報告書、小長谷有紀編『モンゴル高原における遊牧の変遷に関する歴史民族学的研究』、五七―八〇頁）
- 二木博史・一九八三・「ハルハ・ジロムの成立過程について」（『橋研究』八一、六〇―七五頁）
- 一九八七a・「清代ハルハ・モンゴルの奴隸解放文書について」（『東洋法史の探求——島田正郎博士頌壽記念論集——』汲古書院、二二―四三頁）
- 一九八七b（書評）・「島田正郎著『清末清初モンゴル法の研究』（『法制史研究』三七、一三八―一四二頁）
- 柳澤 明・一九九三・「新バルガ八旗の設立について——清朝の民族政策と八旗制をめぐる一考察——」（『史学雑誌』一〇二―三、四五―七九頁）
- 一九九九・「ホーチン＝バルガ（陳巴爾虎）の起源と変遷」（『社会科学討究』一二九、八七―一二頁）
- 楊 選第・金 峰（校注）・一九九八・「理藩院則例」（活字組版）内蒙古文化出版社、五百一十二頁
- 若松 寛・一九八七・「ラマインゲーン考」（『中央ユーラシア史の再構成——新出史料の基礎的研究——』昭和六一年度科学研究費補助金（総合研究A）研究成果報告書、四七―六一頁）
- 欧 文 献
- Riasanovsky, V. A., 1937: *Fundamental Principles of Mongol Law*, Tientsin, 1937, reprint, Indiana Univ., 1965, 343pp.
- リヤザノフスキー著、青木富太郎訳『蒙古法の基本原理』（生活社、一九四三年。原書房、一九七五年、四百五十二頁）
- Vreeland, H.H., 1957: *Mongol community and kinship structure*, Hunan Relations Area Files, 359pp. フリーランド著、愛宕松男抄訳『西北蒙古ナロバンチン寺領における遊牧モンゴルの経済・社会生活（上）（下）』（『遊牧社会史探究』第一六冊、一―三七頁、一九六二年及び第二六冊、一―五九頁、一九六四年。内陸アジア史学会編『内陸アジア史論集第二』国書刊行会、二五三―三四九頁、一九七九年に（上）（下）とも再録。

モンゴル・ロシア文献 (キリル文字)

- Авирмэд, Э., Дашцэдэн, Д., Совд, Г., 1997: *Монгол хууль*, Улаанбаатар, 108pp.
- Дылыков, С.Д.(ed.), 1965: *Халх джигурм*, Москва, 339pp.
- Дылыков, С.Д.(ed.), 1998: *Цааджиги бичиг*, Москва, 341pp.
- Жалан-аажав, С., 1958: *Халх журим боа Монголын хууль цаазны эртний дурсгалт бичиг*, Улаанбаатар, 115pp.
- Жалан-аажав, С., 1996: *Улаан Хацрт*, Улаанбаатар, 52pp.
- Нацагдорж, Ш., 1961: *Улаан хацрт*, Улаанбаатар, 139pp.
- Нацагдорж, Ш., 1972: *Сум хамжлага шавь ард*,

Улаанбаатар, 136pp.

- Ринчен, Б., 1979: *Монгол ард улсын угсаатны судлал, хэлний шинжлэлийн атлас*, Улаанбаатар.
- Соноговсүрэн, Б., 1989: *Хувьсгалын өмнөх Монголын тор ба хууль цага (1911-1920)*, Улаанбаатар, 110pp.
- Сономпалва, Ц., 1961: *Манжийн захиргаанд байсан үеийн ар Монголын засаг захиргааны зохион байгуулалт (1691-1911)*, Улаанбаатар, 131pp.
- Цэрэв, Д., 1964: *Их шавь*, Улаанбаатар, 92pp.
- モンゴル文献 (キリル文字)
- Nasimbajur, С.(ed.), 1963: *Qalqa-jigit*, Ulanbatur, 94pp.

(本稿は、一九九五年九月の国立民族学博物館共同研究「ユーラシアにおける遊牧民形成の歴史民族学的研究」シンポジウム、一九九七年一〇月の第四五回法制史学会研究大会(甲南大学)、同年同月の東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所共同研究「東アジアの社会変容と国際環境」シンポジウム(通算第三回)『モンゴル文書史料の世界』の席上にて、様々な題名で口頭発表した個々の研究を接続改訂してまとめたものである。席上助言をいただいた方々に謝意を表したい)

清代のモンゴル概略図



Die ersten Versuche, die Armenfürsorge auf kommunaler Ebene zu regeln, waren somit nicht sehr erfolgreich. Kirchliche und Kommunale Armenfürsorge wirkten also als parallele Einrichtungen.

Das änderte sich mit Erscheinen des Humanismus als neue aufklärerische Idee. Auch reichere Bürger der Stadt waren nun eher geneigt, durch Spenden, die finanzielle Not der Einrichtungen der Armenfürsorge wenigstens teilweise zu mildern.

Das alles bedeutet ebenso, das die Stadtobrigkeit auch in Zeiten von Nahrungskrisen oder Krisen, die durch die vermehrte Zuwanderung in die Städte entstanden waren, recht wenig auf diesem Gebiet untergenommen hat.

Erst im 19. Jahrhundert gab es Bemühungen, Probleme im Armenwesen durch gemeindliche Einrichtungen wirkungsvoller in den Griff zu bekommen. Die eigentlich wirksamen Organisationen wurden erst durch das Elend Zuge europäischer Industrialisierung geschaffen.

## The Application of Law to the *yeke šabi* in Mongolia under the *Qing* Dynasty's Rule : Serfs of the Great Living Buddha and Criminal Cases

by

HAGIHARA Mamoru

Apart from the nobility and the slaves, the Outer Mongolian nomads under the *Qing* dynasty's 清朝 rule were classified into the following three groups of social standing : namely, *sumun-u arad*, who were the free subjects of the *Qing* emperor, *qamjily-a*, who were private serfs of the Mongolian nobility, and *šabi*, who were serfs of living Buddhas of Tibetan Buddhism. Although the outline of the judicial rule concerning *sumun-u arad* and *qamjily-a* has been made clear, the problem of what law was applied to criminal cases involving *yeke šabi*, who were serfs peculiar to the great living Buddha in the city of *yeke küriy-e* 庫倫 has not been clarified at all, because they were controlled under a special administrative organization. So far, we have three different theories. As a result of identifying the laws applied to three criminal cases of *yeke šabi* in the late *Qing* dynasty, this paper will show that in addition to the original Mongolian law *qalq-a jirum*, *Menggu li* 蒙古例 and *Daqing lili* 大清律例 of the *Qing* government had begun to be in effect by the end of the dynasty. Also, made clear is the continued use of *ulayan*

*qačartu*, collections of judicial precedents of *qalq-a jirum*, as case law until the end of *Qing* dynasty.